





2013年10月25日、日本山岳会ルームにおいて、緑爽会主催のシンポジウム「高橋健治とローゼ・レッサの生涯」が開催された。筆者も講師をつとめたが、関西や北海道からの参加者もあり、予想以上の盛会となったのはうれしいことだった。

新潟港は開港5港の一つとして1869年1月に開港し、イギリス・ドイツ・オランダ・アメリカの4か国の領事館が設置された。ドイツ領事館は13年間開設されていた。領事館のあった場所は新潟市の中心部「萬代橋」の下流左岸の現在新潟グランドホテルの駐車場となっているところである。新潟日独協会では領事館の写真や遺構がないため新潟市民でもその存在を知っている人は少なく記念碑を建てる計画である。(2017年6月3日の新潟日報の記事より)

平成29年3月に新潟日報社常務を最後に退職して現在新潟日独協会副会長を務めている渡辺隆氏から是非お会いしてローゼレッサさんについてお話をお聞きしたいとの連絡をいただいた。私の住んでいる魚沼市(旧小出町)と新潟市は丁度100キロメートル離れているが平成29年8月18日渡辺氏が来訪された。私が用意した資料は「山岳109年」緑爽会シンポジウムの報告(近藤緑)、「越後山岳12号」北越雪譜・独語版・英語版の研究(吉田理一)、「岳人」806号、シンポジウム当日配布されたレジュメである。

渡辺氏はこのシンポジウム開催を知っていれば参加したかったと残念がった、またレジュメ10ページのローゼさんの独文を訳した坪井靖子さんの文と自分の解釈とを比較されている様子だった。さらに、近くドイツに行くが今回はローゼさんの故郷を訪ねる機会はない。ローゼさんが亡くなって年月も経ってドイツ大使館もローゼさんの功績を知っている人がいるかどうか疑問である。新潟日報社の新聞記者時代に疑問に思っていたことが「氷解」するように分かってきた。新潟日報に限らず全国的にもっと知られていい功績のように思う、との感想を述べてお帰りになりました。あのシンポジウムから4年経ちますが予想外の展開がありましたので報告します。

## 米軍占領下の常念岳登山

関塚 貞亨

緑爽会会報第151号田村さんの「常念岳に寄せて」を興味深く読んだ。私も、敗戦後の米軍占領下だった1947年7月下旬のように記憶しているが、5万分の1の地図もなく、ただ「柏矢町から烏川橋を渡って二股を右に常念乗越を目指す」という誰かの登山記を読んで、パートナーの長尾と二人で登った。

乗越に登りついて槍から大喰、中岳、南岳、キレットに続く景観に圧倒されたのを覚えている。穂高は常念の稜線に隠れて見えなかったが、小屋は平屋建てで真ん中が土間、左右に2メートルほどの板の間がある兵舎のような造りだった。小屋の右翼が台所で、爺さんが一人控えていて、おそらく恒男さんのお父さんだったと思う。

その頃の山小屋の夕食と言えば肉も野菜も殆ど見当たらない、うどん粉と戦前の古いカレー粉を使った塩辛いだけのカレーライスが当たり前の時代だった。ところが常念小屋の食事は違った。泊り客は5～6人だったが、土間の竈か七輪の鉄鍋の前に座った爺さんが玉ねぎとサクラエビのかき揚げを揚げてくれたのである。朝食も生卵がついて我々を驚かした。

いまでこそ卵は安いですが、その頃はお米と卵は貴重品で、都会では闇で買う以外には手に入らなか

った。銀シャリの卵かけご飯は御馳走であった。お米は配給制で一人1日2合1勺。それも饅えたような長粒米（タイ米）が月に5～6日分、内地米は玄米で2～3日分が配給されるだけで、玄米を一升瓶に入れて棒を上下させて精米していた。山小屋には1泊5合、2泊なら1升のコメを持参するため闇で手当てする時代だった。

常念小屋は1919年（大正8年）の開設で、前身は槍沢ロッジの補給デポだった。松本に鉄道駅ができるまでは、一番の繁華街はお城から女鳥羽川までの商店街で、その商店街の穂刈、山田の2青年が槍ヶ岳登山の赤沢岩小屋跡に1917年（大正6年）に槍沢ロッジを開設して、常念乗越に補給デポを置き、その後穂刈さんが槍ヶ岳肩の小屋（現在の槍ヶ岳山荘）を、山田さんは常念小屋を開設し、百名山ブームで両小屋とも繁盛しているのは結構なことである。余談ながら、蝶ヶ岳山荘に開設された当時一泊したが、畳1畳に3人という混雑ぶりで、従業員から粗い扱いを受けた。その時に常念小屋の2代続いて篤実な山田さんに蝶ヶ岳小屋を造って欲しかった、彼が経営していたら「もう少しましな扱い方をされたいだろう」と思ったことであつた。その後槍沢ロッジは火事で焼け、少し下流に建て直された。

敗戦後の北アルプスでは物騒な話もあり、烏帽子から槍ヶ岳までの裏銀座には「強盗が出る」という噂があった。無人の三俣蓮華の小屋に品右衛門の息子の富士弥が住み着いて、たまに通る登山者を「食料を置いていけ」と脅したのが強盗話として伝わったのである。

## 滝子山へのいざない ～ 寂憫尾根を中心にして ～

小泉 義彦

滝子山（たきごやま）はいい山である。いい山とは登ってじゅうぶん満足できること、山の容姿がいいこと、高さもある程度あって登り甲斐のあることといえようか。また手軽に行けることもいい。この山は大月市に属し、中央線の車窓からは大月、初狩、笹子駅の間には右側に三つの峰のある大きな山容なのですぐそれとわかる。左の峰の後ろには大きな岩稜が見え、なかなか迫力がある。浜立山とその尾根である。

二等三角点は1590メートルの東峰にありこれが正式な高さとなっているが、中央峰の方が1620メ



ートルと高い。滝子山はその名のとおり南面に多くの美しい滑滝を擁し、沢沿いのコースをたどるとよくわかる。滝子山は以前の500円札にも登場する。雁が腹摺山から見た富士山の絵柄の中、三つ峠の下にこじんまりとした峰二つの山がそうだ。周辺の山からすぐそれと分るのもうれしい。高

川山からは正面に、大沢山や東の権現山からもそれと指摘できる。

山頂からの展望もすばらしい。富士山と周辺の山々、御坂山塊、上河内から聖、赤石、悪沢、塩見、農鳥への南アルプス、八ヶ岳、奥秩父、奥多摩、大菩薩を起点とする小金沢連峰から続く峰々、黒岳、大谷ヶ丸が近い。八ヶ岳のすそ野の左側はるかには穂高も見えるらしい。山頂の北側は木で遮られるので少し離れた展望台に行くとよい。南稜（寂憫尾根＝じゃくしょうおね）からのコースが眼下だ。

国道20号から入ってJRの中央線ガードを越えた右側の高台に次のような名所旧跡の案内札「芦ヶ池跡（伝説あり）、両体道祖神（夫婦合体）、親鸞上人念仏像（お葦物語り）、立石坂の立石（山姥杖の伝説）、白野の大石（水害防護の石）、原地区櫻公園（櫻林の自然公園）、田通の姥神（甲州街道裏通大鹿峠通の祈願神）、大鹿峠滝子山（ハイキング有名、名勝地鎮西ヶ池）、白野山法林寺（古沢あり）、天保一揆集合地（天保七年百姓武七兵助養順寺の集合地）」とある。また、初狩の藤沢神社の横の道端には次の札が立っている。「登山者各位に告ぐ 此度滝子山鎮西ヶ池周辺の3657ヘクタールの面積が歴史景観自然保護地域に指定された。鎮西ヶ池は昔鎮西八郎為朝の妻白縫姫が保元の乱に破れて其の子為若丸と阿蘇家の家臣十三を連れて諸国を放浪して今の東八代郡大蔵山に登り更に溪谷を跋涉して滝子山 1590メートルに至り水の湧く処に小屋を造り池を掘って住んだ。近衛天皇仁平二年に山崩れに会い山裾に移りその地に為若丸と家臣一名並びに阿蘇家の名刀名鑑を残して白縫姫は再び九州の木原山に帰ったと云う」とある。これを裏書するように頂上付近には鎮西ヶ池、白縫神社がある。他に御菜畑、桜馬場が残っていると聞くが場所は不明である。山の東側にある恵能野部落は白縫姫が隠れ住んだところだそう。白縫姫はこの地が大変気に入る「エーノー」と云ったところから恵能野と付いたとか。笹子峠の上り口の新田地区には淡路の人形芝居が伝わり、笹子追分人形としてその人形と衣装が県の無形文化財に指定されているとのこと、興味は尽きない。

この山への登山道としては、初狩駅から藤沢部落を経るもの、笹子駅から桜公園を経てすみ沢伝い、南稜（寂憫尾根）、浜立尾根および沢登りのコースがある。また、北側にある大谷ヶ丸からと東稜がある。大谷ヶ丸には大菩薩峠からの一泊コースと甲斐大和駅からの大鹿峠、曲沢峠経由、湯ノ沢峠からの日帰りコースがある。沢登りのコースには滝子沢と大鹿川に流れ込むおそ沢（三の沢）、ズミガ沢（四の沢）があるがいずれも最後の詰めが苦しい。登るには推測だが90%近くの人はずみ沢ルートを、10%前後の人は南稜を、藤沢経由と大谷ヶ丸経由はわずか、浜立は日によるが皆無に近いと思う。おもな登山口である笹子駅までは高尾駅から約50分、初狩駅は一つ手前である。新宿駅西口から中央道高速バスで中央道笹子まで1時間25分、桜公園近くなので笹子駅から歩く手間が省けて便利だ。7時に乗ると8時25分には着くので南稜（寂憫尾根）を上がれば早い人は昼前に山頂だ。笹子駅は標高が600メートル、滝子山は1620メートルなので、標高差は1000メートル、これを早いときは3時間くらいで、また写真など撮っているときは5時間くらいかかることもある。ただ初狩駅ルートは下山一方で登ったことがない。

南稜は寂憫尾根とも呼ばれ、昭和59年（1984年）に登り口にある山小屋の寂憫庵の人々の手で開拓された。寂憫庵については少々後述したい。寂憫尾根は頂上まで900メートル余を急こう配で岩場もあり灌木を頼りに慎重に登る。一気に上がるルートが好きな人には楽しく、見る間に高度が

稼げ、背後の富士山がだんだん展けてくる。以前、雨のなか岩場を下降中の熟年女性二名の死亡事故があり地元では歓迎されないらしい。岩場を巻くところの鎖はタイヤに付けるチェーンを流用したもので今でも使えるがいつまでもつか。また以前には、急斜面には何本かの白い太いロープが付いていたが却って危ないと短期で撤廃した。四月中旬からはミツバツツジ、ヤシオツツジが咲く、毎週末に訪ねて花がどこまで上がっているかを見るのも楽しい。五月中旬から 1100 メートル付近から 1300 メートルの間にコイワカガミがピンクの花をつける。その群生はみごとで、毎年見に行っても飽きない。何人かこの花のために上がってくる人を知った。秋には葉がチョコレート色に輝き、また次の季節に思いを馳せる。途中特徴のある二本のブナの大木があり、この木に会いに行くだけでも価値があった。ただ一本は 98 年に根元から 2 メートルくらいのところで折れてしまい、今ではそれも朽ちて地面に横たわって名残を留めるだけだ。1450m くらいのところが富士見台と呼ばれ休憩にいいところだ。富士山、御坂山塊、甲斐駒から左に南アルプスの山並みが続く。特に黒岳の右横に小首を傾げた釈迦ヶ岳がなんとも可愛い。最後のロープのある急坂を上がると展望台に出る。今上がってきたルートがこんな高さまでとはっきり分り感激する。富士や南アルプスの連山が目の前に広がる。山頂は間もなくだ。



寂憫庵はオーナーの宮内隆輔さんが 1987 年に男の子三人のための教育の観点と山小屋を持ちたいという昔からの夢を実現させるべくウイークエンドハウスを計画し、無一文から一計を案じて建てたと聞く。宮内さんは大変豪快かつロマンチストであり、会社経営でも腕を振るい、南極やヒマラヤでのエピソードは数知れない。「寂憫庵」は広島出身の詩人大木敦夫氏の次の「寂憫憧憬」がその由来である。寂憫庵の横の登山口にこの詩が板に墨で書かれていたが今ではその板も朽ちている。以前、その謂れを聞いたならそこに書いてあるとの返事だった。

漂泊の思止むなし／風のごと留めかたなし／行き昏れし五十路の旅に／あこがれはつくることなし／この坂を人の降るに／この坂を我は登るなり／樹ありて我と語らむ／花ありて我をうるおす／河ありて行く雲を泊め／草ありて縁たるなり／限りなきものを求めて／限りある身の行く所／唯我に問はむとすなり／行くところいづこなるや／

桜公園を右手に見て橋を渡りカーブを過ぎてしばらく行くと右に入る登山道がある。標識に従って上がると、かつては「トモローランド共和国『寂憫庵』」の札が入口にあった。トモローランド共和国は山小屋、海小屋、ヒコーキ小屋をもつ十数人のチェーンであった。私はたまたま利用する側の共和国国民であって、桜祭り、あじさい祭り、月見祭り、雪祭り行事などに参加したことがあった。行事のあった翌朝寂憫尾根を登って十時ころ降りてくると、朝食が待っておりその前のビール片手の五衛門風呂は何ともいえなかったことが思い出である。2013 年 4 月に寂憫庵同窓会があり七人が集まり、小屋に泊まって旧交を温めた。宮内さんは寂憫庵を手放したいと言っていた。そ

れが交流の最後で、今や宮内さんは病床にあると聞き、幹事役の後藤さんも昨年亡くなった。私は滝子山に1990年ころに初めて登り、以降大変気についてそれから何回も登り、1年に17回登ったこともあった。

ガイドブックでは山と高原地図24「大菩薩」にはすみ沢が実線で、「寂ショウ尾根」が点線で“岩場あり、道不明瞭、上級者向き”の注釈付きで載っている。登山者はこの地図を参照にして登る人が多いのではないか。実際山頂で参照している人を何人か見た。山と溪谷社刊の分県登山ガイドの旧版（山村正光氏著）では登る道に寂憫尾根が唯一紹介されており、“トモロウランドと名付けられた寂憫庵なる別荘地は人が住んでいないようだ。それはそれ、寂憫とはどんな意味だろう。頂上直下に急峻な岩稜帯がある。この登降には注意したい。過去四件の死傷事故がおきている”とある。同改訂版（ロッジ山旅の長沢洋氏著）では、主はすみ沢コースを、南稜はワンポイントアドバイスとして“迷うような心配はない尾根だが、上部は急峻な岩尾根だから下りには使わない方が無難である。過去に遭難の例もある”とある。また当時自然保護委員会（現在理事）の近藤雅幸氏が新ハイキング2011年11月号に「変化に富んだ黄葉の尾根 滝子山～浜立尾根」で寂憫尾根から上がり浜立尾根を下山するルートを詳細に紹介している。その中で“十一月初旬に笹一酒造酒遊館で新酒祭りが行われているので、辛党の方はぜひ立ち寄ることをお勧めしたい”とあり、17時前に寄ることができればまた楽しい。私が滝子山を最後に歩いたのは2013年5月26日である、翌年3月にスキーで足を痛めて以降歩いていない。

### <2012年5月14日の記録>

5月14日、今年初めて滝子山を歩いてきた。この時期は遅咲きのツツジと群生するコイワカガミに会えるのが楽しみだ。また今回は桧平から大鹿林道に降る道が新しく通じたと聞いていたのでここを通るのも目的だった。未知の道を通るのは期待と一抹の不安がある。いつものように寂憫尾根を上がる。薄日さす中、山中がいっぱいの緑に覆われ、ブナやナラの木々は輝いて見える。三つ峠の向こうの白い富士山は霞んでいる。標高1250mあたりからミツバツツジがやっと現れてきたが数が少ない。1400mの岩場付近からコイワカガミがぼつんぼつんと咲いているが群生にはほど遠い。1500m付近までがこの花の領域であるが花芽も少ない。今年は例年よりも寒かったためと思われるが、あと10日もすればもっと咲くのだろうか。この日寂憫尾根から上がったのは私の他に5名、寂憫庵から先行した単独者は湯の沢峠まで行くという。山頂では3組6名に会った。桧平への下りは男坂をとる。桧平からは三つ峠の左側に富士山が先ほどよりはっきりと見えるようになった。いよいよ新道に入る（13時45分）。2つの標識がある。新しいのは「笹子・初狩駅（大鹿林道）」、古いのは「滝子沢林道へ70分 森、沢協議会」とある。以前からあった踏み跡を昨年整備したのである。左下に向けて切り開いて余り経っていない道があり、土留めも新しい。しばらく行くと明白な尾根を下るようになり、倒れた木や枝は除いてないがどンドン下る。一か所木々の間に富士山が望めるところがあるだけだ。岩場にはまき道があり大鹿林道に着いたのが15時15分、1時間半かかった。「左 国道20号」の標識がある。右に行けば寂憫庵から上がってくる道に合流できるが、左にとる。大規模な土留め工事の現場など通過して滝子沢沿いに中央道、電車のガードを潜って国道20号線に出たのが16時24分。「右：笹子駅3.0km、左：初狩駅3.2km」の標識がある。少し遠いが初狩駅への道をとる。一部歩道のないところがあり、そばを大型トラックがびゅんびゅん通る。初狩駅着が17時12分。ホームから滝子の山塊が大きく見え、下った尾根もそれと分かった。いささか疲れたが満足な山歩きだった。（文中写真撮影：小泉義彦）

～《予告など》～

10月懇談会:日時10月30日 18時～ 場所:104号 (会報「山」9月号に掲載済)

山本良子会員から「数字の意味—JACの先人の思いを通して考える」と題してお話いただきます。

11月山行:11月27日(月) 丹沢・大山へ(担当:渡邊貞信、夏原寿一) 雨天中止

皆さん昔登った山です。紅葉見頃が中旬から下旬。相模湾や天候が良ければ冠雪の富士山が展望出来る晩秋の山を歩きましょう!

集合: 9:00 小田急線 伊勢原駅 北口 4番バス停

9:20発(大山ケーブル行き)のバスに乗ります。

行程:伊勢原駅北口⇒大山ケーブルバス停⇒こま参道⇒大山ケーブル⇒阿夫利神社下社…約1時間30分登り…⇒大山山頂(12時頃・昼食休憩～13時)…約1時間30分下り…見晴台經由阿夫利神社下社⇒大山ケーブル⇒こま参道で店見物等しながら大山ケーブル駅バス停へ(15時35分発伊勢原駅行きに乗車)⇒伊勢原駅にて解散 歩行時間:約3時間30分



【参考】・小田原行き急行を利用の場合の時刻表

新宿駅発	⇒	登戸駅	⇒	伊勢原駅着
7:58		8:20		9:00
8:04		8:25		9:06

- ・当日小田急線に乗る前に窓口で必ず「丹沢・大山フリーパス Aキップ」をお求め下さい。往復切符でバス、ケーブル乗り降り自由のフリーキップでお得です。
- ・参加希望者は前々日までに渡邊携帯電話または渡邊携帯メールにご連絡下さい。
- ・昼食を持参ください。通常の日帰り山行の装備(ウインドヤッケ必携)をお願いします。

12月例会<忘年会>

日時:12月16日(土) 午後2時～ 参加費:1000円 場所:集会室

お話:田村佐喜子会員に「松本に住んで、山あれこれ」と題してお話いただきます。

※当日はミニ弁当と乾きものを用意いたしますが、お酒をはじめ、おもたせ大歓迎です。

※参加連絡は12月10日までに下記へご連絡ください。

<連絡先>夏原寿一

1月山行:1月20日(土) 初詣山行として丹沢の弘法山へ (詳細次号で)

### 編集後記

異常気象続きの夏から秋(いや冬?)ですが、山行当日は本当に好天に恵まれました。

・前号、田村さんの寄稿に重大なミスがありました。お詫びして訂正いたします。それはコケモモを摘む場面で恒さんの言葉にある「高山植物」が、正しくは「高山食物」だったのです。これでない面白さが出てきません。いわば文章中の肝の部分でした。私の入力変換ミスで申し訳ありません。

・小泉さんから滝子山への思いの詰まった文章をいただきました。文章中に引用された近藤雅幸さんの記述にある、笹子駅近くの笹一酒造では毎年新酒フェアが開かれます。今年は11月11・12日の土日です。この近くの山に行って帰りに一杯。お勧めです。(荒井)

<次号予告>12月22日発行の主な内容

報告:10月30日懇談会報告、11月山行報告、忘年会報告

皆様からの投稿・寄稿をお待ちしております。